

OSAKA
DENTAL
UNIVERSITY



大阪歯科大学広報

NEWS

No.

132

2004. Feb



目 次

- ・平成 16 年新年互礼会 ……3
- ・平成 16 年の大阪歯科大学の発展を祝って
 理事長 佐川寛典 ……3
- ・年頭所感
 学長 古跡養之真 ……4
- ・一般教育系生物学教室教授就任 ……6
- ・教授就任挨拶 川合進二郎 ……7
- ・平成 15 年度 第 6 学年父兄会開催 ……8
- ・平成 15 年度 第 2 回日本私立歯科大学協会
 事務局長会議 本学で開催 ……9
- ・平成 15 年度 教職員忘年慰労会 ……9
- ・学位（博士）授与報告 ……9
- <トピックス>
- ・シドニー大学 学生 3 名本学を訪問 ……10
- ・楠葉学舎「屋内」全面禁煙に ……11
- ・牧野学舎校地の一部老人クラブに開放 ……11
- ・人 事 ……12
- ・雑 報 ……12
- ・あとがき ……12



平成 16 年新年互礼会（楠葉学舎講堂）

平成16年新年互礼会

平成16年1月5日(月)午前11時より、恒例の新年互礼会が楠葉学舎において開催された。田中法人事務部長の進行により、佐川理事長ならびに古跡学長が新年の挨拶を述べ、教職員および大学関係者354名が出席した。互礼会終了後、会場を食堂に移し、村上常務理事の乾杯で新春の歓談会が盛大に開催され、和やかなうちに大阪歯科大学の平成16年がスタートした。

平成16年の大阪歯科大学の発展を祝って

理事長 佐川 寛典

明けましておめでとうございます。

今年の干支は甲申(きのえさる)であり、年男である私にとって、干の甲は「事の始まり」「新しい気」の意味をもち、支の申は「伸びること」「伸ばすこと」の意味があるといわれているので、同質の目的であって、まったく正反対の作用が生じ、「拡大と縮小」「発展と収縮」などが考えられ、あたかも大自然や環境を象徴し、われわれ人類に暗示と警鐘を鳴らしているようである。

さて、昨年9月22日に小泉第二次改造内閣が発足し、文部科学大臣に河村健夫氏が就任した。河村氏は、平成11年の小淵第二次改造内閣時に文部総括政務次官を、平成12年の第二次森内閣時に文部総括政務次官、文部科学副大臣を、平成14年の小泉第一次改造内閣時に文部科学副大臣を歴任されておられ、近年の課題山積の私学教育には、ご理解ある剛毅決断の方であると聞く。

私学における歯科医学教育も複雑多岐にわたり、重要な問題も多く、私立大学である大阪歯科大学は教職員一同、一糸乱れぬ団結をもって、対処しなければならない重要な年である。

とくに、国試に関連して昨年厚生労働省から「国家試験は資格試験である」との明確な回答を得たが、その他の対応すべき諸問題、コ・デンタルスタッフとしての歯科衛生士、歯科技工士の資質向上のための制度

改革と育成問題、平成18年に義務化される歯科医師臨床研修問題等、いまや、歯科医師にとって医学と歯科医学の医療における基本的問題の改変と改革を真剣に考え、これを避けて通ることができない時期が到来しているのではないだろうか。

今年は、教職員お一人お一人が「生きる力」をもって、この多事多難の時を皆様と共に切り抜けようではありませんか。年間に交通事故での死亡数は約1万人で、自ら生命を絶つ自殺者は3倍の3万人を超すという事実は「生きる力」を失った人が如何に多いかということです。今こそ、私たち教職員は「生きる力」を培い、この強力なパワーを結集して大阪歯科大学を守らなければなりません。

次に学生支援として、「確かな学力」を学生たちに与えて戴きたいことです。その為には、①知識と技能、②学ぶ意欲と思考力、③判断力と表現力、の3条件が必要であり、この3条件が揃った時、「確かな学力」と評価できるでしょう。

そして今一度、世界の動きに目を向けると、9・11同時多発テロに始まったイラク戦争など、戦後秩序の回復は疎か、未だに、われわれの愛すべき地球に真の平和は訪れていないが、大阪の堺が生んだ歌人、与謝野晶子は日露戦争に従軍した弟の壽三郎に送り届けた手紙に「君、死にたもうことなかれ・・・」は、あまりにも有名である。

軍国主義一色にぬられていた当時の日本において、肉親によせる深い愛情とはいえ、その切切たる呼びかけは、平和を望む当時の国民に勇気と、そこ知れぬ感動を与えたものである。そのため晶子は国賊と誹謗され、目に見えぬ迫害を受け、一人歩きもできなかったと聞く。しかし、晶子は人間としてあたりまえのことであるとして平然と過ごしたのである。このことこそ、勇気ある人として、世に称えられるべきことではないでしょうか。

今、日本の国民は晶子のような真の勇気あるニューリーダーを切望し、自然を愛し、人類の平和と幸せを望んでいるのです。

さて、46億年前に誕生した地球は、世界の異常気象に耐え、温暖化や、東北地方の群発地震など、変動期であり、一触即発の危機(touch and go situation)が迫っています。

日本の誇る断層湖である琵琶湖は670.5平方キロメ

ODU NEWS No.132

台に姿を見せた最初ではないかと思えます。当時、いち早く、その思想を取り入れ、カリキュラムの検討に当たっていた本学も、その後約2年の歳月を要し、平成14年にスタートした新カリキュラムは今年で3年目に入ります。順調に育って欲しいと思えます。机上のプランが実践に入り手直しを急ぐ声も上がっているようですが、大局を誤らず、このカリキュラムを大きく成長させていただきたいと願うばかりです。一方で歯科医師国家試験相対評価説が、厚生労働省の再三の否定にもかかわらず、警戒感を強めています。しかし、我々がひるめば学生諸君はもっと怖じ気付くと思いません。自信を持って事に臨んで下さい。

2004年は医学部にとっては歴史的な年だといわれています。それは本年4月から医師臨床研修の必修化が実施されるからです。歯学部も2年後にスタートするわけですが、私は研修医一人ひとりが十分満足する制度としてスタートすることを強く望みます。それには研修医が研修に専念できるような経済的な裏付けと環境の整備です。本学には卒業生を一学年まるまる収容できる施設はありますが、指導医の増強にはまだまだ努力が必要です。すでに国から歯科医師免許証を交付されている研修医に対するカリキュラムの策定、1年後の評価法については、卒前教育とはまったく次元の異なったものが作られなければなりません。2年間は決して十分な時間ではないと思えます。歯学部では2004年が最も熱い議論がされるべき年だと考えます。

卒業生のもう一方の進路である大学院教育も、現在曲り角にさしかかっております。わが国の大学院教育のレベルが低いといわれる大きな理由は、大学の延長線上に位置する付け足し的な教育機関であるからだといわれています。そして、大学院教員については「研究重視」、「教育軽視」の傾向があまりにも強い点が常に指摘されています。

ノーベル賞学者の野依良治先生はわが国における大学院充実策とは院生の数を増やすことのみであって、大学院の理念、使命は議論されていないと述べられ、欧米の一流大学院の教育内容を日本の大学院と比べると相撲でいえば三役と十両、もしかしたら幕下と言い切っておられます。まったくその通りで耳が痛いどころではありません。そして、日本の大学院生が欧米の研究者に伍していくことができるかという問に対しては、答はNo!で語学力の不足もさることながら、基礎

学力と一般教養、知性に対する感性のバランス、さらに自ら考え、自ら主張する力が不足していると述べておられます。

アジア諸国のなかでも日本人学生の英語力が低いことはよくいわれます。その理由は「英語を学ぼうとはするが、英語で学ばない」からだそうです。本年5月、コロンビア大学と結ぶ予定の協定のなかに、アメリカにおけるポストグラデュエートコースの受講という一項があります。本学卒業生の「英語で学ぶ」一助となればと願っています。

大学院教育における最近の話題としては社会人特別選抜制度の導入があります。夜間も含め昼夜開講制で実施している私立歯科大学もすでに数校みられます。本学も大学院研究科である程度の案が練られておりますが、そろそろ実施に向けての具体的な議論をお願いしたいと存じます。

また、従来からの講座をベースとした大学院研究科ではなく、総合研究所を基盤とした独立研究科を設ける考えも大学院の活性化につながると思います。すでに2003年から松本歯科大学で実施され大きな成果が期待できると西連寺学長からうかがいました。同じ放射線学を専攻する最も親しい先輩として、常に気兼ねなくお話できる気安さからある意味大いに自慢されたわけですが、これも今年から実現に向けて考えねばならないと思います。核となる研究所には国内、国外を問わず、実績ある研究者を招き、世界に向かって開かれたまったく新しい研究・教育機関にするのだとその広い人脈を背景に夢を話しておられましたが、まったく羨ましい限りで思わず「使ってくださいよ」と言ってしまうました。

野依先生も、もし人材不足なら数を限って有能な外国人を登用すれば大いなる刺激になると語っておられます。中央歯学研究所は「設備から人の時代」に入れたと思います。昨年には文科省の科学研究費補助金の採択件数でも松本歯科大学に大きく水を開けられました。

人材は宝です。学部教育、卒業臨床研修においては優秀な歯科医師を、大学院教育においては将来のリーダーを養成することに教員の方々は強い使命感を持ち、学生とともに自分自身も成長していただきたいと切に望む次第です。FDにも奮ってご参加下さるようお願いいたします。

大学格付けの時代といわれています。客観的かつ公平・公正な第三者評価に十分耐えられる大阪歯科大学を築くため、今年は共に熱くなりたいと壇上から強く希望いたします。

時間の関係で割愛いたしますが歯科衛生士専門学校3年制移行、人権問題、Faculty Development、産学連携については明日といわず今日の午後からもう始動いたします。冒頭でも申しましたように一層のご助力を慎んでお願い申し上げます。大変長くなりましたが、ご挨拶といたします。



新年互礼会会場の様子



互礼会後の歓談会で挨拶する村上常務理事

一般教育系 生物学教室教授就任

平成15年12月1日付けで、一般教育系生物学教室助教授の川合進二郎先生が、教授に就任された。

川合教授の略歴は以下の通りである。



一般教育系生物学教室教授

川合進二郎（かわい しんじろう）

理学博士

生年月日 昭和22年8月21日

<学歴>

昭和41年3月 広島県広島基町高等学校卒業

昭和42年4月 広島大学理学部生物学科入学

昭和46年3月 広島大学理学部生物学科卒業

昭和46年4月 広島大学理学部研究生

昭和47年4月 京都大学大学院理学研究科修士課程植物学専攻入学

昭和49年3月 京都大学大学院理学研究科修士課程植物学専攻修了

昭和49年4月 京都大学大学院理学研究科博士課程植物学専攻入学

昭和52年3月 京都大学大学院理学研究科博士課程植物学専攻単位習得退学

昭和53年3月 理学博士学位取得（京都大学）

<略歴>

昭和52年6月 京都大学教養部講師（非常勤）（昭和55年3月迄）

昭和55年10月 大阪歯科大学助手（進学課程生物学教室）

昭和55年4月 大阪歯科大学講師（進学課程生物学教室）

昭和63年4月 大阪歯科大学助教授（進学課程生物学教室）

平成15年12月 大阪歯科大学教授（一般教育系生物学教室）

教授就任挨拶

生物学教室 川合進二郎

平成15年12月1日付けで、生物学教室教授を拝命いたしました。教授就任に当たりまして、これから生物学教室が本学の教育ならびに研究について果たすべき役割と、今後の教室運営について抱負を述べたいと存じます。



今日の社会と生物学

今日、医療はもとより日常の食品生産に亘る広範な分野に、生物学の知識が必要とされる時代となっています。たとえば、再生医療や遺伝子治療などの問題が多くの医療関係者の関心事になっておりますし、また遺伝子組み換え食品は我々の日常生活の中にまで入り込みつつあります。このような状況にあって、生命科学に対する市民の興味や関心はますます大きくなっており、地域医療に携わる歯科医師にとっても、歯科医療の動向とともに生命科学の動向も理解しておくことが強く求められています。そうした時代的・社会的要請の下、歯学教育における生物学の果たす役割はさらに重要になってきているといえます。

ところで、基礎科学の振興はいつの時代においても重要ですが、近年多くの教育関係者が指摘するように、残念ながらわが国では初中等教育でのいわゆる「理科離れ」が進行しており、その結果として生物学教育がこれからの科学や医療を担うべき青年に十分浸透していない現実があります。新しい時代を生きていくために生物学の知識がより多く求められる一方で、それを担うべき学生の側には生命科学の進歩を理解するための基礎的な知識が整っているとは言い難い現状がある、という認識に到達せざるを得ません。

生物学教育へのとり組み

歯学部における生物学教育が果たす貢献は、いかなる時代でも歯学・医学の基礎を支えるということに尽

きると思いますが、上述したような状況を認識するならば、これからの歯学部における生物学教室には従前のものに加えて、次に述べるような課題と役割がより重要であると考えられます。

本学学生に対する生物学教育の位置付けは、生命現象全般の基本的な原理と仕組みを理解するための基礎科学教育と、細胞学や分子生物学など歯学・医学の発展を推進していく先端的生命科学の教育、この二つの方向での学生教育が必要であるといえます。勿論、この両者は互いに分離されるものではなく、互いに連続し密接な連携の下に教育として展開されなければならないものです。このような課題の下に現状を見て参りますと、2002年にはじまったカリキュラム改訂により独立した生物学の講義が廃止され、代わりに「医療人のための基礎科学」の中で物理学・化学などとともに生物学の一端が講義されています。しかし、この講義形態で系統的な生物学教育を全学生に対して行うには、かなり時間が不足していると痛感しており、今後の課題としてなんらかの対策が必要であると考えております。

教室として主に担当する学生は1・2学年の学生であり、彼らは大学の教育を初めて経験する学生ですから、教員が学習への意欲を常に引き出すよう心がけて接しなければなりません。大学における初期教育を成功させるためには、まず教員の側から学生に対して積極的に援助の手をさし伸べるのが肝要です。さらに、この過程で学生が得た疑問や学ぶ動機が、その後の学習意欲を支えるものでなければなりません。どのような職業でも同じですが、とくに歯科医師にとって生涯学習は自己の能力と可能性を磨くために必要なことです。そのためには、常に新鮮な疑問を持ち続ける学ぶ心が必要とされます。こうした観点に立って、基本から生物学を学びたい学生、あるいは高校での学習不足を認識する学生に対しては学ぶための意欲を引き出す努力とともに、それを具体化する新たな学習の場が必要とされます。学生の目線に立った生物学教育をさらに心がけ、実践していきたいと考えております。このような視点に立って、学生とともに歩む過程で、学生の知識を確認しながらその知識をさらに積み上げてゆくような講義や学習の場を構築する努力の大切さを改めて痛感しています。

研究課題と教室のあり方

次に、研究についての課題を述べたいと思います。生命に対する生物学の考え方として、原核生物のバクテリアでも、我々ヒトのような高等動物でも、その生命活動を担う基本的な原理の多くは共通しています。その一例が、地球型生物の遺伝情報発現はセントラルドグマによって示されるというものです。とくに分子レベルにおける生命現象は、生命の祖形がおそらくはそれほど多様ではなかったことと、その後の分子的選択と淘汰によってその多くが共通しています。これが我々生物学を学んできた者の生命現象に対する見方の基本になっています。

ヒトとバクテリアの違いは、一見すれば明らかなように形態的にも機能的にもあまりにも大きなものがあります。さらに生物全般についてみると、その世界は極めて多様性に富んでいます。ここで我々が生命の進化的なプロセスと生物間の変異を念頭に置くならば、ヒトの細胞で見られる現象でもバクテリアやハエで観察される事象も互いに比較検討が可能であり、その結果得られる事実は他の生物種にも敷衍しうるわけです。こうした生物学の基本的な生命観を正しく反映させつつ、現実に要請のある歯科分野の研究課題に添えていく、ということが生物学教室の基本的なスタンスになります。

医療はさまざまな実用的な技術によって支えられています。その多くは基礎的な研究によって生み出されています。但し、基礎的な研究も医療現場の要求から乖離して一人歩きすると形骸化してしまう恐れがあります。この点において、生物学が歯科医学と連帯を維持するものであるためには、やはり医療現場からのニーズに常に目を向けておかなければなりません。そのためには、基礎系講座は言うにおよばず、臨床系の各講座とも常に連携を可能にしておくことが大切です。生物学教室としては、とりわけ学生と若手の研究者に門戸を開き、あるいは具体的に共同研究できる環境とテーマを探りながら、大学の各部署と連帯を強めてゆきたいと考えております。



おわりに

生物学教室は、ここに述べたように教育および研究

のいずれにおいても多くの課題を抱えていると思われませんが、これらを数少ないスタッフで対応していかねばなりません。私は勿論その先頭に立って課題を達成するために最大限努力し、目標に向けて邁進するつもりですが、そのためにはやはり学内の他の教室・講座との連帯連携が不可欠であると痛感しております。教室の体制を常に外に向かって自由で開かれたものにして、学生や教職員が気楽に立ち寄ってもらえる生物学教室にしてゆきたいと念願していますので、今後とも教職員の皆様にはご支援ご協力賜りますよう心からお願い申し上げます。



平成15年度 第6学年父兄会開催



毎年12月中旬に実施している6学年単独の父兄会であり、今年は12月13日(土)午後1時より、楠葉学舎1号館1階第1大講義室において開催された。

当日は、古跡養之眞学長の挨拶、加藤信次父兄会幹事長の挨拶に続き、井上正義学年指導教授から卒業を控えたこの時期、卒業後の進路、歯科医師国家試験に向けての心構え、また、卒後臨床研修歯科医師制度や6学年の今後卒業までの日程等についてのきめの細かい説明がなされた。

その後、第2大講義室において学年指導教授を中心に各助言教員の先生方と父兄および学生も交え三者懇談で就学状況・進路について熱心に懇談された。

なお、当日出席されたご父兄は54名であった。

第6学年父兄会次第

- | | | |
|----------|----------|-------|
| 1. 開 会 | 事務部長 | 上田 実 |
| 1. 挨 拶 | 学 長 | 古跡養之眞 |
| | 父兄会幹事長 | 加藤 信次 |
| | 学生部長 | 新池 孜 |
| 1. 説 明 | 学年指導教授 | 井上 正義 |
| | ・進路説明 | |
| | ・国試対策 | |
| | ・今後の日程 | |
| | ・国試日程 | |
| 1. 父兄懇談会 | 各助言教員と面談 | |

平成 15 年度 第 2 回日本私立歯科大学協会
事務局長会議 本学で開催

平成15年度第2回日本私立歯科大学協会事務局長会議が、昨年12月11日(木)午後1時から本学天満橋学舎西館7階大会議室において開催された。

全国17私立歯科大学のうち13大学21名が出席し、本学からは古跡学長をはじめ、田中法人事務部長、前野法人経理部長、上田大学事務部長が出席した。会議は古跡学長の挨拶で始まり、中原 泉協会専務理事を議長に歯科医師国家試験のあり方等について協議した。



日本私立歯科大学協会事務局長会議

平成 15 年度 教職員忘年慰労会

年末恒例の教職員忘年慰労会が、去る12月26日(金)午後3時から附属病院14階のレストラン「プラザ14」で開催され、教職員250名が参加した。

今井理事による開宴の辞、佐川理事長の挨拶に続き、古跡学長の乾杯の発声とともに平成15年を締めくくる慰労会がスタートした。やがて、会場の彼方此方で職種、職場を超えて談笑の輪が広がり、賑やかなうちに時が経過した。お楽しみ抽選会では、理事長賞(旅行券)は教育情報センターの出水さん、学長賞(商品券)は教務学生課の西本さんが当選されたのをはじめ多数の商品が用意され、抽選の度に歓声とため息が会場を充たしていた。夕暮れとともに談笑の輪も徐々に少なくなり、平成15年に別れを告げた。



平成 15 年度 教職員忘年慰労会

学位 (博士) 授与

- 逸見浩史 乙第 1422 号 (平成 15 年 12 月 24 日)
試作レジン系根幹用シーラーの生体親和性
- 岡西裕公 乙第 1423 号 (平成 15 年 12 月 24 日)
露出セメント質に対するスケーリングおよびルートプレーニング前のレーザー照射の応用について
- 釜谷晋平 乙第 1424 号 (平成 15 年 12 月 24 日)
口臭検査装置の新規開発
- 黒田収平 乙第 1425 号 (平成 15 年 12 月 24 日)
Effects of Six Particulate Metals on Osteoblast-kuke MG-63 and HOS Cells *in vitro* (6 種類の金属粉末が骨芽細胞様細胞に及ぼす影響)
- 末瀬裕一 乙第 1426 号 (平成 15 年 12 月 24 日)
自然発症歯肉炎ラット(ODUS/Odu)の歯垢形成感受性に関する分析
- 清水一彦 乙第 1427 号 (平成 15 年 12 月 24 日)
乳歯初期う蝕形成パターンに及ぼす表層エナメル質の影響
- 奥村 信 乙第 1428 号 (平成 15 年 12 月 24 日)
口腔年齢指標による地域口腔保健評価
- 岡田友之 乙第 1429 号 (平成 15 年 12 月 24 日)
学校歯科保健におけるう蝕活動性試験の応用について
- 堀内浩司 乙第 1430 号 (平成 15 年 12 月 24 日)
集団における口腔保健状態評価への回帰直線の応用

南十字星の国より
シドニー大学 学生3名本学を訪問
学生の国際交流に関する小委員会

平成16年1月7日(水)から20日(火)にかけて、シドニー大学歯学部(Shool of Dentistry)の学生、ピーター・バイズ君(25)、アントニー・ベネデット君(23)、ネッド・レストム君(23)の3名が本学を短期研修のため訪れた。シドニー大学と本学は、1996年に「学生の相互訪問に関する合意書」を締結し、以後毎年学生の相互研修を実施している。シドニー大学の学生が本学を訪問するのは、今回で3度目である。

ピーター、アントニー、ネッドの3名は、昨年(平成15年)の12月31日に来日した。関西国際空港には本学から「学生の国際交流に関する小委員会」委員の岡崎先生、橋本先生が出迎えに行き、その夜は橋本先生宅に一泊した。元旦から5日までは、日本でスキーをしたいとの来日前からの希望により、橋本先生およびワンダーフォーゲル部員等とともに、梅池にある本学の厚生施設「梅

池山の家ヒュッテ・シルバー」で過ごした。

7日から本学での研修が始まり、まず楠葉学舎において午前11時から古跡学長、新池学生部長、学生部委員会委員、学生の国際交流に関する小委員会委員、本学関係者および本年度シドニー大学歯学部訪問研修に参加した学生等が出席して、開講式が行われた。終了後、食堂において歓迎の「昼食会」が開かれ、午後からは楠葉学舎の各施設を見学した。研修期間中ピーター、アントニー、ネッドの3名は、本学学生および教員宅へそれぞれホームステイし、日本式の日常生活を過ごした。8日から13日にかけては、楠葉学舎にて本学学生に交じって一般教育系、基礎系、そして臨床系の講義と実習に参加した。9日には、校友会のお世話により「学生との交流会」が開催されて100名近い学生が集まり、新池学生部長も自ら参加した邦楽部の演奏、OBの教員が多数参加した軽音楽部の演奏や、空手部による模範演技、そして体育委員会によるエール等も行われた。また、楠葉学舎での研修最終日の13日にはシドニー大学学生と本学学生との「ディベート」が活発に行われた。



修了式後の記念写真(左からネッド、ピーター、アントニー)

人 事

昇 任

生物学教室 教授 川合進二郎
H15. 12. 1付

退 職

薬理学講座 講師 伊達 昌孝
H15. 12. 14付
歯科矯正学講座 助手 来田里衣子
H16. 1. 31付

委 嘱

平成15年度FD委員会委員
小正 裕, 小谷順一郎
林 宏行, 前田 照太
以上 H15. 12. 24付
財務企画委員会委員 田中 昭男
H15. 12. 26付

雑 報

住所変更

本山 正治 小児歯科学講座
〒 584-0082 富田林市向陽台4-1-8-110
TEL 0721-28-1954
一居 真代 細菌学講座
〒 596-0808 岸和田市三田町1855
TEL 0724-43-6073
土佐 淳一 有歯補綴咬合学講座
〒 560-0022 豊中市北桜塚3-9-25
TEL 06-6857-7808
山本 智恵 附属病院 看護師
〒 571-0064 門真市御堂町19-5-205
TEL 06-6900-0104

～ご結婚おめでとうございます～

附属病院 看護師 山本 智恵 (旧姓 下田)

～お悔やみ申し上げます～

歯科理工学講座 秋山 真理 ご母堂様逝去
口腔衛生学講座 永目 誠吾 ご尊父様逝去
法人調査室兼秘書課 池田 良則 ご尊父様逝去

あとがき

—余談—

昔話を2つ。昔、1ドルは360円でした(固定相場制)。では、何故1ドル=360円に決まったか。戦後の昭和24年、ドルと円の交換レートを決める際、円の意味を聞いたGHQの担当官が「円は360度だ。1ドルは360円にしよう」ということで決まったらしい。ウソのようなホントの話。ちなみに、「円」という通貨は明治4年の「新貨条例」でそれまでの1両を1円とすることで誕生した。また、当時1ドルは1円であった。その後、円は昭和46年のニクソンショックを経て現在の変動相場制に移行した。

続いて、正露丸の話。正露丸もとの名前は征露丸であった。征露丸は明治35年に誕生した。日露戦争の2年前のことであり、当時の時代を反映して強国ロシア(露国)を征伐するという意味を込めて「征露丸」と命名された。当時の日本の軍隊では、戦場で戦死するよりも外地での衛生状態の悪さから病死するほうが多く、征露丸は兵士の命を守る携行薬であった。現在、多くの製薬会社から正露丸と名のつく商品が製造されており、昔のまま征露丸という名前のあるところもある。日露戦争から100年が経過した。

∞ ∞ ∞

何とか、「ODU NEWS」として第2号が出せました。第1号もいろいろと厄介なトラブルが発生し、予定より大分遅れてしまいましたが、今回もようやく発行することができました。まさに、前途多難！無理難題を克服すべく、五里霧中の中を暗中模索の状態。

トピックス記事への皆さんからの投稿を期待しています。広報委員会の「ando」または「matumura」までメールをお送りください。

大阪歯科大学広報 第132号
発行日 平成16年2月28日
編集発行 広報委員会
〒573-1121 枚方市楠葉花園町8-1
電話 072-864-3111